

[シンポジウム]

## 文化心理学からのコメント

西 光 義 弘

### 1. はじめに

10年前に西光(1993)において学習者用の語用論参考書の必要性を述べたが、未だ現れていないようである。この10年の間に文化心理学の研究が盛んになり、対照語用論の基盤になるべき文化差の実証的な研究が積み重ねられてきた。このコメントでは文化心理学的な観点から対照語用論を考察し、講師の方々の提出された内容の裏にあるものを探り、そのような語用論参考書のあるべき姿として文化差を基盤とするための方向を示唆したい。

### 2. 関山論文について

まず具体的な例を糸口としよう。関山講師のあげている日本人学生が外国人教師に推薦状を依頼するのに用いたという(1)の例文を考えてみよう。

(1) Professor Smith, I want you to write a recommendation for me.

(1)は日本語の(2)に基づいていると考えられる。

(2) スミス先生、推薦状を書いていただきたいのですが。

同様の例は脇山・佐野(2000)にあがっていることからみてもこのような事例は多いと推測される。夏休みのホームステイと語学研修プログラムに参加していた日本人高校生が滞在数日後にホストファミリーにもうあなたを預かることはできないと言われて、他の家庭に移ることになったというある。その原因は何かほしいときや、頼み事をするときにもっぱら I want ... / I want to ... ということによるものであったというのである。

依頼の誠実条件として話者が相手に本気でその行動をしてほしいと思っているという条件があるので、話者に関することは主張することによって間接発話行為が成立するはずである

ので、(1)の例が失礼になるということの説明には間接発話行為の理論に制約を課する適用範囲のより広い何かが必要となる。そこで文化の違いがかかわっているのではないかという可能性が出てくる。その可能性を探るには文化心理学に頼りたいところである。昨年出版された文化心理学を素人向けに概説した Nisbett (2003) を見てもさまざまな認知実験により、西洋が分析的思考、東洋が全体的思考であるというまとめ方で、いまだ西洋および東洋それぞれの文化間の違いまで目が届いていないし、分析思考、全体的思考という包括的なラベルを貼り付けるだけでいまだ認知様式のシステムの解明は行われているとは言いがたい。ここでは将来の文化心理学の発展のための方向を示唆しつつ可能性を探ることとする。

鶴田/ロシター/クルトン (1988) によれば英語の発話行為では基本的に相手の自由意志を尊重するということが基本となっている。それに対して日本語では相手に頼る態度を示すことが対人関係を強化することになる。(1)の例文を発することによって日本人学生は先生に頼る気持ちを表すことでいわゆる「甘え」の関係を築こうとしているのであるが、米国人の先生にとっては(1)は話者の希望を聞き手に押し付けるということになるので、到底受け入れられるものではない。文化心理学のなかでも対人関係において西洋が個人主義、東洋が集団主義であると提唱している。そのシステムの中に組み入れられるべき日英語の違いである。(1)と対照的な意味で興味深いのは申し出の発話行為において英語母語話者がよく発す(3)の例文である。

(3) コーヒーがほしいですか。

(3)を言われた日本人の反応は「「コーヒーがほしいですか」とはなんて言いぐさだ。あまりコーヒーを入れたくないのだな。そんなやつに入れてもらうもんか。」というものである。(3)はもちろん英語で言う(4)に基づいたものである。

(4) Would you like a cup of coffee?

日本語では文法的に「ひとごと」と「わがこと」をはっきり区別する。他人の個人的な心的状態に立ち入ることは許されない。(3)は相手の私的な感情に土足で踏み入れているような印象を与えてしまうのである。それに対して英語では「ひとごと」と「わがこと」の区別をしないし、(4)は相手の自由意志を尊重して決めてかからないということで丁寧な表現となるのである。

### 3. 村田論文について

村田論文は以下の対人関係を構築する積極的ストラテジーを学習者に教えることによって

効果的にコミュニケーション能力を高めることができたという実践的な報告であった。

- (5) ① address term の使用  
② back channeling / emphatic response  
③ answer with additional information  
④ compliment  
⑤ showing interest  
⑥ hedge/softener の使用

(5) のストラタジーはすべて相手に関心を強く持っていることを表している。全体的な統一原則を提示し、個々のストラタジーとの有機的な関係を示せば具体的に提示されていないストラタジーも学習者自身が工夫でき、さらに効果が上がるものと予想される。この有機的なシステムをどのように構築するかが次の課題となる。

一般に対照語用論の研究では一般的に明示的な語用論的教示のあることによって効果が上がることを語用論的教示のないグループを比べることによって示している。ところがどのような語用論的知識の提示が効果的であるのかの研究はいまだ十分になされていない。考えられる語用論的知識の暫定的なシステムをいくつか作成し、それらを実験的研究により判定し、一番効果的なものを選んでいかなければならない。そのような研究を積み重ねることによって理想的な学習者用の明確な語用論参考書を徐々に完成させなければならない。

村田論文の言うポジティブ・ボライトネスは日本人特有の「うちの人」に頼り気味であるというような場合を含んでいない。日本語では一般に「うち」と「そと」の区別が大きな役割を果たすことが知られている。また関山論文に関して述べたように他人の個人的領域に踏み込まないという原則もある。英語と日本語におけるポジティブ・ボライトネスとネガティブ・ボライトネスは違うのかという問題を追及しなければならないのである。そのためにも文化心理学的な研究の成果を利用しなければならない。

#### 4. 高橋論文について

演繹的・明示的提示が効率がいよ習得が可能であることは既に示されているという前提のもとに、次の段階の課題であるどのような演繹的・明示的提示が最も効率がいよということに関する研究に取り組んだものである。高橋論文の調査では(6)のような結果が得られている。

- (5) LUB > IDE > REQ - 1 > REQ - 2 > OLF > REQ - 3

(5) の結果を見るとなぜこの順序であるのかということがすぐに疑問として念頭にあがる。少々考察してみると LUB と IDE は独立性が高いということから、第一言語習得の場合にも独立性が高いものは習得が早いという一般原則があるのではないかということが推測できる。

(6) I was wondering if you could VP.

学習者は I wonder if you could VP. や Could you VP? でもいいと思っているのではという可能性が残っている。つまり一般的に出てこない形が使えるのか使えないのかがわからないという問題がある。また機能的提示の限界としては文法における非文のように不適切な例の提示が必要となる。高橋論文の持つ意味として一番重要なことは動機が一番重要であるということである。そして次の課題としては動機を高める有効な方法は何であるかを見極める研究をする必要があるということになる。

## 5. 結論

では最初に設定した学習者用語用論参考書が近い将来に出てくるかということを考えよう。今回のシンポジウムで明らかになったのはまずたたき台となるものを使ってみる必要があるということである。そのためには今までの対照語用論の研究を集大成して、知見をまとめなければならない。このシンポジウムがその方向を打ち出せたのではないかと思われる。

### 参考文献

- Nisbett, R. E. 2003. *The Geography of Thought: How Asians and Westerners Think Differently...and Why*. New York: The Free Press.
- 西光義弘 1993. 「語用論と英語教育—幻の学習者用語用論参考書を求めて」『現代英語教育』1993年6月号、29-32.
- 鶴田庸子／ポール・ロシター／ティム・クルトン 1988. 『英語のソーシャル・スキル』東京：大修館書店.
- 脇山怜／佐野キム・マリー 2000. 『「英語モード」で英会話』東京：講談社.